

JICA 海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS

10

2025
OCTOBER

特集

第3回社会還元表彰

受賞者たちが今に至る道

派遣国の横顔 [ラオス]

60年を経て隊員への高い期待が続く
最初の青年海外協力隊派遣国



地域の子どもにソフトボールを教える中、試合後の道具掃除や倉庫の整頓を定例化。自主的にトイレ掃除などしてくれる子も出てきました(ブラジル)



共創・革新・環流 — JICAが目指す3つのキーワードを 具現化しているのが協力隊

こばやしひろゆき
小林広幸さん
(タンザニア／理数科教師／1992年度1次隊・長野県出身)

独立行政法人国際協力機構 (JICA) 理事

1992年、青年海外協力隊に参加。96年、国際協力事業団 (現 JICA) 入構。ルワンダ事務所長、産業開発・公共政策部 (現 社会基盤部) 次長、四国センター所長を務める。2019年、青年海外協力隊事務局長に就任。24年、協力隊OVとして初のJICA理事に就任。



JICA海外協力隊発足60周年を迎えました。これまでに5万7,000人以上の協力隊員が延べ99カ国に派遣されましたが、派遣国に与えた影響は数字以上のものがあると感じています。例えばフィリピンは60年前、最初に派遣された国の一つですが、戦後約20年を経た当時でも、隊員が現地で受け入れられることは容易ではなかった。それでも一から信頼を築き上げながら活動を続け、2016年には協力隊はアジアのノーベル賞とも呼ばれるラモン・マグサイサイ賞をマニラで受賞しました。国と国との関係性を構築するには、政治や経済の関係だけでは難しい。草の根レベルで互いに尊敬し合う土台ができてこそ、真の信頼関係が生まれてくるのです。そう考えると、協力隊員の果たした役割は大きいと思います。

私はタンザニアで理数科教師隊員として活動したのですが、赴任当初、授業に生徒が集まらない時もあり、悩みました。雨の日には学校全体で誰も来ないこともありました。ところがある雨の日、偶然立ち寄った生徒と話をしたところ、「なぜ先生は毎日学校にいるの?」と言うのです。その時、彼らから見れば自分が特殊だったことに気づきました。傘がない、働かなければいけない、学費が払えない…。学校に来ることができない事情を聞いて初めて、私は彼らに合わせて夕方に特別授業を行うことにしました。そこから私の活動は

始まったのです。“当たり前”というものはないということに気づいた瞬間でした。こうした気づき、営まれる協働や信頼関係の構築といった隊員活動の本質は、昔も今も変わりません。一方で日本国内の環境は大きく様変わりしつつあり、少子高齢化や地域が抱える問題への意識が高まっています。この6月には「地方創生2.0基本構想」が閣議決定され、その中で協力隊員の経験を日本社会に生かしていこうということが示されました。社会が変化していく中で、多様な価値観のつなぎ手となっていくことが求められているのです。

60周年のテーマである「世界と日本を変える力」。それこそが協力隊の力です。現地の人とのコミュニケーションを通じてお互いを理解し、信頼し合い、双方に行動や意識の変容を及ぼす。そうした経験を日本に持ち帰り、同じようなアプローチで社会に還元していただきたいと思います。

互いに学びながら新しい価値観、信頼関係をつくるプロセスをJICAでは“共創”と呼びます。そこに新しいアイデアを取り入れて“革新”し、その経験を社会で生かし、次の共創に繋げていく“環流”。この3つをキーワードにJICAは事業を進めていて、それを最も具現化しているのが協力隊事業だといえます。私自身、隊員経験者として、今後も協力隊事業をしっかり育て、大きく発展させていきたいと考えています。

Text = 池田純子 Photo = 飯渕一樹 (本誌)



COLUMN — 表紙によせて

サンパウロの西にあるマリリア市で、貧困層を含む地域の子どものソフトボールを教えました。現地ではなじみのない“道具に感謝の心を持って大切に扱う”という意識を知ってもらうため、試合後の道具掃除を定例化。「高額な道具を長持ちさせるため」と言っていました。倉庫内の整頓も行ううちに子どもたちは楽しくなって、自主的にトイレ掃除などをするほど成長を見せてくれました。飯田康史さん (日系／ブラジル／ソフトボール／2022年度3次隊・北海道出身)

国別索引	掲載ページ
インド	23
ウズベキスタン	13
エクアドル	15
エチオピア	16
グアテマラ	10、12、18
タンザニア	2
フィリピン	14
ブラジル	1、9
マラウイ	11
ミクロネシア	22
ラオス	5、6、7、24

職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	11、14
建築設計	6
稲作	5
自動車整備	7
青少年活動	13
水泳	15、18
ソフトボール	1
日本語教育	23
日本語教師	9
理数科教師	2
体育	16、22、24
小学校教育	10、12

出身都道府県別索引	掲載ページ
北海道	1、5
岩手県	23
福島県	13
神奈川県	7、10
長野県	2
富山県	9
静岡県	18
岐阜県	15
愛知県	12
大阪府	6、22
徳島県	24
福岡県	11、16
大分県	14

JICA海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS

10
2025
OCTOBER

CONTENTS

2 JICA海外協力隊発足60周年 特別インタビュー

3 CONTENTS／索引

4 知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから 派遣国の横顔 [ラオス]

8 [特集] 第3回社会還元表彰 受賞者たちが今に至る道

16 スキルや意欲で道を開く 就職ストーリー

18 派遣から始まる未来 先輩隊員たちの社会還元

20 INFORMATION — JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

21 JICA海外協力隊派遣現況

22 あの日、地球の、あの場所で。

23 隊員めし — 任地の食生活に彩りを！

24 公開！私の派遣国生活 [ラオス]

『クロスロード』(通常号)は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に9回発行しています。

【凡例】JICA海外協力隊の隊員 (経験者を含む) については、次のように表記しています。

国際協力さん (ケニア／環境教育／2025年度1次隊)			
氏名	派遣国	職種	隊次

JICA海外協力隊には、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。



見やすく読みまちがえにくい
ユニバーサルデザインフォント
を採用しています。





派遣国の横顔

Profile of the partner country of JOCV

〈ラオス〉

現在も隊員への高い期待が続く
青年海外協力隊初の派遣国

Text=工藤美和 写真提供=ご協力いただいた各位



お話を伺ったのは
よしむら ゆ き
吉村由紀さん

JICAラオス事務所次長。2004年にJICA入構。約半年間の海外OJTをラオス事務所で行う。その後、青年海外協力隊事務局、人間開発部を経て、09年にラオス事務所へ。財務部、南アジア部などを経て、24年6月から3度目のラオス駐在中。

ラオスは日本が最初に青年海外協力隊を派遣した国で、1965年12月に稲作1人、野菜2人、日本語教師2人の隊員が、ラオスの地を踏みました。内戦や政変を受け、78年の隊員任期満了をもって派遣が中断されましたが、その後、市場経済導入などの改革路線に転換したラオス政府から派遣再開の要請があり、90年から再び隊員を派遣。現在まで累計1,000人以上が活動してきました。

ラオス政府からの協力隊への厚い信頼は、毎年、首相への表敬が行われることから感じます。コロナ禍の一時期を除いて続けられており、派遣中の全隊員が首相官邸に伺い、ラオス語で活動報告を行います。ある政府高官から「隊員の皆さんがそれぞれ任地の方言で報告する様子をとてもほほ笑ましく感じました」と伺ったこともあります。

派遣職種は、教育では小学校教育・理科教育、保健医療では看護師・助産師が多いです。バレーボールや陸上競技、体育などのスポーツ分野、伝統手工芸品の生産者やコーヒー農家などを支援するコミュニティ開発もニーズが高い職種です。60年前と変わらず農林水産分野の要請も根強くあります。

ラオスは国土の約7割が森林で人口密度も低いため、都市化が著しい首都のビエンチャン以外は開発が進みにくい状

ラオス人民民主共和国
Lao People's Democratic Republic



ラオスの基礎知識

面積：24万km²
人口：758.2万人（2023年、ラオス統計局）
首都：ビエンチャン
民族：ラオ族（全人口の約半数以上）を含む計50民族
言語：ラオス語
宗教：仏教
※2025年8月14日現在
出典：外務省ホームページ
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/laos/index.html

派遣実績

派遣取極締結日：1965年11月23日
派遣取極締結地：ビエンチャン
派遣開始：1965年12月
派遣隊員累計：1,110人
※2025年8月31日現在
出典：国際協力機構（JICA）



メコン川とビエンチャンの街並み（2004年撮影）。チベットから南シナ海に至るメコン川は、全長4,200kmと東南アジア最長の河川で、内陸国のラオスでは貴重な漁場でもある

況にあり、経済危機が長期化しています。しかし、農業が盛んで、果物や昆虫まで豊かな自然から得られる恵みがあり、食べることに困らない国です。

人々は優しくてちょっとおせっかいで、家族や知人との結びつきを大切に、時間に縛られずにのんびり暮らしています。こうしたラオスでの活動は、心の豊かさ

とは何かということについて改めて考えさせてくれるでしょう。活動の中では事前の想定と異なる状況が起きたり、物事がなかなか進まず焦ることもあるでしょうが、隊員の皆さんにはそうしたことも含め、楽しんで過ごしてほしいと思います。



ビエンチャンにそびえ立つ「アヌサーワリー・パトゥーサイ」は、内戦による戦没者の慰霊碑として1960年代から建設が始まった建物で、パリの凱旋門を模している。写真は66年に撮影された一枚

派遣国の横顔

1960年代のラオス王国時代の農業から、ベトナム戦争後の復興支援まで
ラオスの発展・復興に貢献した隊員たち

米自給に向け日本式稲作を紹介した 隊員番号1番の大西さん

1965年12月、ラオスに派遣された5人の初代隊員のうちの1人が大西規夫さんだ。首都ビエンチャンから南に13kmのサラカム郡にある稲作試験場で、各種の栽培を行い推奨品種の普及を進め、米の収量増を目指すという要請だった。派遣前訓練でフランス語を習得し、ラオスに赴任すると、「誰もフランス語を話しておらず、所長と副所長が片言の英語を理解する程度。私は配属先が決まっていたましたが、野菜隊員の同期2人は配属先も要請も全く定まっておらず、自分で開拓するしかない状況でした」。在外事務所はなく、隊員のサポート態勢が整わない中での派遣開始だった。

現在も人口の7割が農業に従事するラオス。当時から自給的農業が大半で、焼き畑による陸稲栽培などが行われていた。「日本式の米作りでは、直線上に間隔を空けて苗を植え、水量を適切に管理し、除草を行います。ラオスでは種を田に直接まき、水は雨まかせ。雨期には雨で種が流されてしまうし、乾期は米作りができない状況でした」。

ラオス語で稲作について詳しい説明ができなかった大西さんは、所長にかけ合って、試験場内に圃場^{ほじょう}を確保し、子どもの頃から身につけてきた水田作りを見せることにした。しかし障壁もあった。大西さんがはだして田んぼに入り苗を植えると、農水省の役人である職員たちは、「そんな粗野な作業は私にはできない」と拒否するのだった。それでも、米が大きく実ると感心し、大西さんが日本から取り寄せた足踏み脱穀機を「とても便利だ」と感謝してくれたという。

大西さんは初代隊員としてラオスに貢献したいと意気込んで活動したが、「一つのきっかけを見せたにすぎなかった」



空港で手を振る大西さん(中央)らラオスの初代隊員5人(写真提供：JICAラオス事務所)

おおにし のり お
大西規夫さん
ラオス／稲作／1965年度1次隊・北海道出身

PROFILE

稲作農家に生まれ、子どもの頃から家業を手伝う。高校卒業後にアメリカで農業研修を受ける中でケネディ大統領の演説やPeace Corpsの活動のほか、学生との交流を通じて途上国の状況を知る。日本でも若者の海外派遣が始まると知り、帰国後すぐに日本青年海外協力隊に応募、応募者700人の中から31人の合格者の1人に。帰国後は民間企業を経てOTCA(現JICA)に入団し、ネパール、タンザニア、エチオピア、ポーランドに駐在し、協力隊事業を支えた。



当時のラオスの高床式住居（『若い力』1967年7月号より、住人は大西さんの同期隊員）

と振り返る。「日本の稲作のように、労力を投入して良い米を多く収穫するという意識は当時のラオスの農家にはなく、長年続く農法を変えるには時間がかかると感じました」。

当時の職員住宅には自炊設備がなく、食事は買ってくるパイヤなどの熱帯フルーツと湯でやわらかくしたフランスパンばかり。当時はラジオもない。そんな生活を彩ってくれたのが「リンサオ」(娘さんと遊ぶ、の意)という風習だ。每晚、同僚たちから誘われ近くの集落の若い女性のいる家を訪ねた。涼しい高床式の家に上がり、ロウソクを囲んで家族と話すのだ。大西さんは情報収集やラオス語習得の機会としたが、現地の若者にとっては唯一の出会いの方法だった。「家の前を通りかかると、『大西さん、ご飯食べたか』と聞いてくれて、貧しいながらももち米のご飯をごちそうしてくれました。つらい時にはその優しさにどれだけ助けられたか。ラオスの人々との友情は私の国際協力の原点です」

任期満了が近づくにつれ、隣国ベトナムでの戦争が激しさを増し、軍用トラックの姿を多く見かけるようになった。ある日、大西さんの住まいに軍の反乱で落とされた爆弾の破片が飛来、屋根を突き破り大西さんのベッドが黒焦げになった。「外出中だったため助かりましたが、寝ている時だったらと思うと、今でもぞっとします」。

それから約60年。大西さんの後任の稲作隊員をはじめとする長年の農業支援が実り、ラオスは2000年に米の国内自給を達成した。「先日お会いした駐日ラオス大使からも、もち米の収量が当時の10倍に増えたと聞きました。ぜひ再訪してその様子を見たいですね」。

こうもとじゅん こ

河本 順子さん

ラオス／建築設計／
1990年度3次隊・大阪府出身

PROFILE

大学で建築工学を学び、卒業後は企業に2年間勤務。子どもの頃から海外への興味があり、協力隊に参加した。帰国後は、開発コンサルタント会社を経て、JICAのラオス森林保全プロジェクト、シニア海外ボランティア案件開拓に従事。2000年には、ラオスでの協力隊員時代の同僚と教え子と共に日本の大学院で4年間学び博士号を取得。その後も、ミャンマーで教育分野のNGO代表を務め、JICAのインドとパキスタンでの大学支援プロジェクトなどにも携わった。

1990年代、これからのラオス復興に寄与する
建築科の学生たちの学びをサポート

戦乱や政変を受け協力隊派遣が中断していたラオスだが、1986年に経済開放を柱とする改革路線を取り、国交や経済の正常化を目指した。90年には15年ぶりに協力隊派遣が再開され、その翌91年、河本順子さんは通信運輸郵政建設省管轄の建築学校に建築設計隊員として赴任した。「ビエンチャンの町自体が暗い雰囲気で、学校などの建物は壁がボロボロ、道路は舗装が剥がれてぬかるみ、ソ連やフランス製の車がたまに走っているものの、信号機は大半が作動してなくて、長い混乱期を町が物語っているようでした」と河本さんは当時の印象を語る。

河本さんへの要請は、同僚の教員と共に建築科の学生を指導することだったが、赴任早々、壁にぶつかった。実は河本さんは大学で建築学を学んだものの、教えた経験はなかった。協力隊の村落開発普及員や青少年活動に憧れて応募したが不合格で、3度目の応募時には建築設計で応募してみてはとの助言に沿い、合格していた。配属先で講義の様子を見ると、ソ連や東ドイツ、ベトナムに留学した教員が、各留学先で学んだ建築学をベースに担当科目を教えていた。学生には意欲があり、教員の板書を熱心に書き留めていた。「子どもが話すようなラオス語しかできず、教員経験がない私が何の役に立てるのかと悩みました」。

一方、生活面では、当時のラオスでは日本人が珍しく、



建築学校の教員たちと授業について意見交換する河本さん

河本さんは配属先でも町中でも目立った。世代の近いカウンターパート（以下、CP）や同僚、知り合いのさらに知り合いのような人たちからも誘いを受けた。冠婚葬祭だけでなく、「家族で川遊びに行くから一緒に行こう」「ヤギを買ったから焼き肉をしよう」などと内容もさまざま。河本さんは分け隔てなく参加し、アヒルの血を固めた伝統料理を食べ、アルコール度数50°のラオラオ（現地の蒸留酒）も飲んだ。「出されたものはすべて食べ、飲む覚悟で臨みました」という河本さんの心意気はラオス人たちに喜ばれた。

1年近くたった頃、河本さんの専門知識が生きてきた。さまざまな建築基準がまとめられた日本の参考書や、母校から送ってもらった建築雑誌を持っていた河本さんのもとに、学生たちが勉強の相談に来るようになったのだ。さらに河本さんは、日本で行われる学生向け国際コンペに学生が参加できるように手配し、作品づくりを支援した。

河本さんは、授業が各教員の留学先国の専門用語を交えた板書ばかりで、ラオス語による教科書がないことに気づいた。偶然、在ラオス日本大使と話す機会があり、教科書の必要性を訴えたところ、「賛同していただき、小規模無償資金協力を使って、ラオス語による教科書を印刷することができました。完成後まもなく私は任期満了で帰国しましたが、教科書はその後も3代にわたって派遣された後輩隊員たちが、内容を改良していつてくれたと聞いています」。

配属先は95年に設立されたラオス国立大学工学部に編入されることになり、そこで教えていたかつてのCPや同僚教員、河本さんの教え子が、大学の教員になるのに必要となる学位取得のため、留学先として河本さんの母校の大学院を選んだ。河本さんも彼らに合わせて博士課程に入り、留学生生活をサポートした。元配属先は、現在は建築学部として独立し、日本の大学とのスタディーツアーや共同研究を行うまでに発展している。

「日本の大学との連携が広がったのは、私や後任の隊員たちがきっかけとなったのかもしれません。当時の私は何も貢献できなかった思いでいっぱいでしたが、結果として、今の展開に至る過程に関われたことを幸せに思っています」

現地でのロックダウン、配属先変更を乗り越え
不発弾処理組織の車両整備環境の向上を目指す

ラオスでは1964年から75年のベトナム戦争中、約2億6,000万発もの爆弾がアメリカ軍によって投下され、その数は戦争当事国だったベトナムを上回り世界最多だ。投下された爆弾の約3分の1が不発弾として今も残り、除去完了には数百年かかるといわれている。大谷祐樹さんは不発弾の調査・除去を行っている政府組織UXOラオに配属され、その問題を身近に感じた。

大谷さんは赴任早々から困難に見舞われた。コロナ感染



シェンクワン県事務所では不発弾調査の準備をする、地元住民から成るスタッフたち

者数の抑え込みに成功していたラオスに渡航した直後、現地でパンデミックが起きてしまい、2カ月以上ホテルに缶詰めになった。大谷さんへの要請は、UXOラオのチャンパサック県事務所、不発弾処理に使う車両の管理方法や整備技術などを整備士にアドバイスすることだった。しかし要請は白紙となり、首都にある同組織の本部に配属先を変えることとなった。その後も感染者数がぶり返したため自宅待機となり、渡航から実に9カ月後に活動がスタートできた。「本部の業務は各県事務所のマネジメントが主で、車両はあるものの整備士は配置されておらず、整備や故障時には車をディーラーに持ち込んでいました。私は何をしたらよいのか、途方に暮れました」

それでも大谷さんは本部の車両管理をしているマネージャーやドライバーの仕事を観察しつつ、できる活動を探り始めた。一つの機会となったのが、UXOラオの全体会議だ。大谷さんは地方事務所のスタッフのニーズを探るチャンスと捉え、会議に来た各県事務所のドライバーにアンケートを実施。車両や整備機材の不足や、特に地方では部品供給に時間がかかることなどが問題として挙がった。

そこで考えたのが、点検を定期的に効率よく行ってもらうためのリストと手順書の作成。故障を未然に防げれば業務効率の改善につなげられる。

活動の舞台(裏) ―心温まる儀式「パーシー」

ラオスで参加すると忘れられなくなるのが「パーシー（正式名称：パーシースークワン）」という伝統的な儀式だ。結婚や出産、新年、新築、病気からの治癒などのお祝いや旅の安全など人生の節目に皆で祈る。その日の主役を中心に祈とうして参加者全員から白い糸が手首に巻かれた後、参加者同士も互いに糸を結び合い、安全や健康、仕事や勉強の成功を祈り合う。

大西規夫さんは集落の正月（4月）のパーシーに招かれ、「相手を重んじる心の温かさを感じて、結んでもらった糸を帰国するまでつけていました」と振り返る。今でも隊員が帰国する時はパーシーで送られることが多い。JICAラオス事務所の吉村由紀次長は、「ある小学校では低学年の児童たちが緊張しながら隊員へのお礼の言葉を述べた後、儀式が執り行われました。良い活動をしたんだと見ていて胸が熱くなりました」と話している。



パーシーの様子。花や竹ひご、後で巻き合う白い糸が結わえられた「パークワン」という飾りから伸ばされた白い糸を持ち、参加者全員で祈る

「どこをどう見て行えばよいか具体的に示し、点検スキルの向上を目指しました。また、部品名などは地域や人によって言い方が異なり専門用語が不統一で混乱を招くため、今後日本などから支援を受けることも想定してラオス語と日本語の対応表も作成し、電子データで提出しました」

大谷さんは2年目に入って、ようやく不発弾除去を行う現場の整備状況を知る機会を得た。不発のクラスター爆弾が国内で最も多く埋没するシェンクワン県だ。「町が爆撃でまるごと焦土となり、町ごと高台に移設された地域でした。貧しい地域の人は不発弾の残骸を生活用具に使ったり、再加工してアクセサリーにして観光客に売ったりしていて、残骸を拾う時や再加工中に不発弾被害に遭うこともあったと聞きました」

除去は地元住民を中心に1チーム8名、13チームで作業をしており、所有車両はフル稼働だった。整備担当は1人だけで業務負担が大きい上に、整備用設備の不足や作業環境の悪さが目についた。そのため大谷さんは、シェンクワン県事務所の業務改善提案書をまとめ、本部に提出した。

困難な状況で活動した大谷さんだが、それでも後任隊員が必要だと考えている。「ラオス全土の不発弾の量や被害を考えると、UXOラオが事業を継続できるよう、継続的な支援が必須だと感じました」。

第3回 社会還元表彰



2025年7月に行われた表彰式の様子

受賞者たちが 今に至る道

「JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰」が今年で3回目を迎え、応募した帰国後20年以内のOVたちの中から7人の受賞者が選出されました。6月に閣議決定された「地方創生2.0」の基本構想で協力隊経験者のようなグローバル人材の活用が謳われるなど、開発途上国での活動を経たOVの活躍に期待が高まっています。この特集では、そうした社会還元を体現する受賞者たちが、今に至るまでにどのような葛藤や紆余曲折を経てきたのかを伺いました。現役隊員・OVを問わず、今後のキャリアのヒントにいただければと思います。

Text=秋山真由美 (P9、P11、P13-15)、大宮冬洋 (P10、P12)
Photo=阿部純一 (本誌 P8) 写真提供=ご協力いただいた各位

表彰式当日の
映像はコチラ



大賞・多文化共生賞

青木由香さん

日系/ブラジル/日系日本語学校教師/
2005年度0次隊・富山県出身

NPO法人アレッセ高岡 理事長

2010年4月に「高岡外国人のことばと学力を考える会」として発足。外国にルーツを持つ子どもたちの間で高校進学に辿り着けないケースが多いとの課題感から、高校進学のための学習支援を始めた。キャリアデザインや各種情報の支援などにも展開し、20年からは市民性教育事業を掲げ、国籍や言語・文化の違いにかかわらず全ての住民が共に地域の未来を築く社会を目指す。23年に2022年度国際交流基金の「地球市民賞」を受賞。

※「アレッセ高岡」は、団体名をポルトガル語表記した時の頭文字を取った愛称だったが、21年9月にNPO法人化した際に正式名称となった。



現役隊員への メッセージ

活動中の悩みも葛藤も失敗も、全部未来の自分につながる種だと実感しています。それが芽を出して花開くのは、任期中なのか、帰国後なのか、年老いてからなのかは人それぞれだと思いますが、その種を大切にしてください

外国につながる子どもの支援に努めた15年 たどり着いたのは学習支援・情報支援・市民性教育の3本柱

「日本語がわからず、学校の授業中ただ黒板を見つめるばかりの子どもたち。やむにやまれぬ思いで活動を始めました」と語るのは、NPO法人アレッセ高岡の理事長を務める青木由香さんだ。

協力隊員としてブラジルの日系人コミュニティで日本語や日本文化を教えていた青木さん。保護者の出稼ぎへの随伴で日本へ行った青少年が何らかの課題を抱えて帰ってくるケースがあったが、任地の人から「日本の学校教育はどうなっているのか」と問われてうまく答えられなかった。その経験から、帰国後は外国人相談員として学校現場へ入り、ブラジルやパキスタンなどにルーツを持ち日本語理解に困難を抱える子どもの学習支援に携わった。

しかし現場で取り組む中、週1回1〜2時間とわずかな業務でできることの限界に直面した。また、子どもたちに必要なサポートは日本語学習に限らず多岐にわたり、すべてに一人で行き届くことはできないとも感じたという。そこで2010年、仲間と共に立ち上げたのがアレッセ高岡だった。

4人の中学生から始まった受験科目の学習指導は口コミで広がり、これまでに約270人の子どもたちの高校進学を後押ししてきた。今や取り組みは学習支援にとどまらず、多言語による子育て・教育・キャリアデザインの情報提供、高校進学説明会・相談会の開催、県知事への提言など多方面に及んでいる。

活動を展開する中では、地域の保守的な空気にも直面した。青木さんは「伝統を重んじる高岡という土地柄ゆえか、外国につながる子どもたちが抱える課題への理解や共感が得られにくい面は感じてきました」と振り返る。そうした環境下で、子どもたちは母語や母文化を押し殺し、日本語習得や日本の学校への適応を求められ続ける。

「支援は間違いなく必要です。ただ一方で、よかれと思ってやっている“支援”が子どもたちの個性を奪うことにならないか、日本社会への同調・同化圧力の一端を担ってしまっているのではないかと葛藤するようになりました」

新たなヒントを得たのは20年、「市民性教育」という概念との出会いだった。これは多様な人々が対等に地域の未来をつくるための意識や資質を育む教育のことで、青木さんはアレッセ高岡の活動の柱に「市民性教育事業」を加え、各種講座やワークショップ、イベントなどを積極的に開催。現在は「学習支援」「情報支援」「市民性教育」の3本柱で、外国にルーツを持つ子どもや若者が潜在能力を発揮し、支援される側でなく主体的に活躍できる場づくりにも力を注いでいる。

「彼らが誇りを持って輝ける場をつくり、そのための教育の在り方を問い続けること。それが地域の多文化共生、ひいては地方創生や社会全体の発展につながると確信しています」



外国につながるのある高校生と日本人高校生の協働による短編映画の撮影風景。アレッセ高岡が制作や上映をサポートした

アントレプレナーシップ賞

ほしの たつろう
星野達郎さん

グアテマラ／小学校教育／
2013年度3次隊・神奈川県出身

株式会社NIJIN 代表取締役

「教育から世界を照らす」という企業理念の下、教員向けの研修サービス「授業てらす」や不登校児童のためのオルタナティブスクール「NIJINアカデミー」など13の事業を運営。学校の内と外から教育を変えることを目指す。NIJINアカデミーはメタバース上の本校舎と全国31のキャンパスのハイブリッドで小中一貫教育が受けられる独自モデルで、全国500人超の生徒が学んでいる。



現役隊員への メッセージ

私は国際協力を強く志して協力隊に参加したわけではありません。ただ、自分がやりたいことを見つけたいと思い、がむしやりに頑張りました。当時はそれに意味があるのかわかりませんでしたが、今は、人のために活動する協力隊の精神は、本当に〈いつか世界を変える力になる〉と思っています。この言葉を胸に、一生懸命に頑張ってください！

教育現場の中で限界に直面 独立・起業で不登校児童に学びの選択肢をつくる

新卒参加でグアテマラに赴任した星野さんは、帰国後に結婚し、妻の地元である青森県八戸市で小学校の教員になった。教員生活は充実していたが、学校で自分を出せずに暗い顔をしている生徒の存在がいつも気になっていたという。

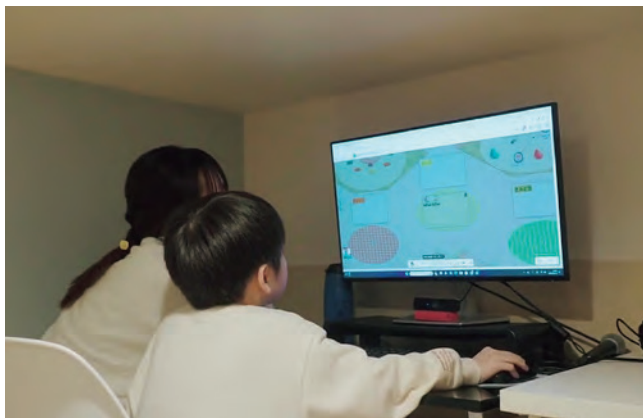
「個性的な子や特技がある子、賢い子ほど、学校では問題児とか優等生というレッテルを貼られて周囲から浮いてしまい、個性や能力を発揮しにくい状況がありました。また、仮に自分のクラスの生徒を支援できても、他のクラスの生徒や、ましてや学校全体には届かない。教員という立場の限界を感じました」。

グアテマラでは、先住民系住民が多く暮らすキチエ県の教育事務所に配属された星野さん。指導主事や市の教育長たちと共に算数授業研修会を企画し、教員同士が学び合う授業研究も県内12市に普及させた。

「県全体の教育の仕組みを変えるきっかけをつくれたと思っています。その経験から青森県でも教員の業務改善をする提案を県に対して行ったのですが、時間がかかり過ぎることを悟りました。ならば全国規模で教育の仕組みを変える活動をしようと思って起業したのが2022年のことです」

最初に取り組んだのが、教員研修プラットフォーム「授業てらす」の立ち上げだ。トップクラスの教員の授業を見て学び、各地で勉強会を開催、立ち上げ2年後には500人の教員の参加を得た。しかし、「その間に不登校児童が全国で10万人も増えたのです。教員という学校の内側からの改革では防げない、従来の学校とは違う教育手段を選択できるシステムが必要だと思いました」。

アカデミーの名前「NIJIN」を思いついたきっかけは青森県での教員時代にある。「国の有形文化財でもある新むつ旅館で週末ボランティアをした時のことです。北前船で栄えた遊郭の最後の一軒であるこの旅館には、往時を知るおかみさんがいて、悲惨な境遇と思われがちな遊女たちにも笑顔があったことを教えてくれ、『人



NIJINアカデミーのオンライン授業で学習する子どもたち

はどこにいても幸せになれる』と信じていました。私は、人は誰かのために大きな力を発揮する。自分が幸せになる力と、他人を幸せにする力の両面が必要だという意味を込めて、NIJIN（二人）としました」

双方向のコミュニケーションができるメタバースの技術を使って自宅から出ることが難しい子どもたちにアプローチできるNIJINアカデミーは、在宅で公教育を受けられる仕組みとして高く評価されており、子どもたちそれぞれが在籍する学校からの出席認定は97%と高い。

企業などとの協業をすることも多いため、教員がキャリアチェンジででき得る場としても注目されている。教員は毎月100人以上の応募があり、合格率はわずか3%。しかし、周知や人気を得るための特別な秘訣があるわけではないという。「ウェブサイト丁寧に作り込んで、毎日開催している体験会に参加してもらうこと、教員の採用と育成に力を入れることなど、やるべき施策を徹底的にやってきた結果です」

現在、全国には約35万人の不登校の児童がいるとされる。「NIJINアカデミーを広め、学校とは違う手段で公教育を自分らしく受けられる世の中にしていきたいと思っています」

地域活性化賞

しょう た きよひと
庄田清人さん

マラウイ／コミュニティ開発／
2014年度2次隊・福岡県出身

一般財団法人ちくご川コミュニティ財団 副理事長

九州北部を東西に流れる筑後川の周辺地域を対象に、社会課題解決に取り組む市民団体などをサポートする組織。個人や企業からの資金・技術・情報などを、活動団体へと提供する立場で取り組んでおり、休眠預金等活用事業の資金分配団体でもある。2024年には民間財団としては九州初の奨学金事業を開始。不登校児童のフリースクール利用料などを補助している。



現役隊員への メッセージ

協力隊では、これは放っておけない！と思う場面が頻繁にあります。帰国後はそうした社会課題に直面する機会が減り、何かをする原動力が弱まりがちです。そうならないよう、例えば会社勤務の傍らでNPOに参加するなどして、隊員時代の感覚を持ち続けてほしいですね

協力隊経験をローカルに生かす 地域の社会課題解決のための伴走支援

不登校、引きこもり、貧困、虐待、発達障害、外国にルーツを持つことなど、日本で生きづらさを抱える子どもや若者は増え続けている。彼らに光を届けるのが「ちくご川コミュニティ財団」副理事長の庄田清人さんだ。休眠預金等活用事業における「プログラム・オフィサー（以下、PO）」として、これまでに子どもの学習と食の支援を行う無料塾、不登校児を支える団体、若者の自立を支援する団体などを伴走支援してきた。

POは、助成を受ける団体と共に活動しながら、事業が適切に実施されるように見守る役割を担う。事業計画の立案から資金管理、事業監査、広報・渉外まで、高度なスキルと知識が求められるが、「その基礎は協力隊時代に培った」という。2014年にコミュニティ開発隊員としてマラウイに渡り、低栄養の子どもと家族に寄り添い、栄養教育やヘルスパスポート（母子手帳）の改訂に奔走した庄田さん。その中でPCM（プロジェクト・サイクル・マネジメント）手法などを実地に学んだことはもちろん、「社会課題を見つけて解決する活動」への思いが深く刻み込まれた。



ちくご川コミュニティ財団で育成しているPO人材たちと庄田さん

「物質的には貧しかったけれど、マラウイの子どもたちは毎日楽しそうで目が輝いていました。一方で帰国後、地元の福岡県飯塚市でまちづくり事業やSDGs教育などに関わる中で、不登校のような日本の子どもたちの現状を知り『どうにかせな、放っておけん』という気持ちが強くなりました」

そんな当時に出会ったのが、19年に設立されたちくご川コミュニティ財団だった。福岡県で初めて市民が立ち上げたコミュニティ財団（※）で、筑後川が流れる地域で社会課題の解決に取り組むNPOなどに対して資金面・非資金面で支援活動を行っていた。20年、財団が休眠預金等活用事業の資金分配団体として選出されたタイミングで、庄田さんは本格的に参加することになった。

「最初は未経験の業務の連続で、やることも多岐にわたってきつかった。隊員時代と比べてより多くの人と関わり、1億円規模のプロジェクトを動かすということの難しさを痛感しました」

10年以上入出金などの取引のない休眠預金を活動資金とすることから、外部からの厳しい意見や批判にさらされることもある。それでも、「何のためにやっているのか、目的を再確認しながら、関わる相手と信頼関係を築いていくことが大事です」と力を込める。「目の前の課題は尽きませんが、立ち返るパワーをくれるのはマラウイでの原体験。現場で子どもや若者たちの姿を見ることが原動力になっています」。

現在、庄田さん一人だったPO人材は協力隊経験者も含めて8人に増え、それぞれの強みを生かしながら活動ができる体制になった。今年6月に副理事長となった庄田さんは彼らのマネジメントをしながら、今後はPOの育成にも力を入れ、「人材の環流」を起こしたいと意気込む。

「協力隊経験を日本で生かし、日本での経験を海外で生かす。グローバルという言葉を実践していきたいと思います」

差し出す手を結び合う手にして、庄田さんの挑戦は続く。

※コミュニティ財団…事業対象の地域・コミュニティを特定して社会課題解決などの慈善的・公益的な活動を行う非営利団体のこと。

開発協力実践賞

こんどう さき
近藤 咲さん

グアテマラ／小学校教育／
2016年度1次隊・愛知県出身

しえん
NPO法人 幸縁 代表理事

「支援から幸縁へ」という理念の下、グアテマラの子どものための教育向上を目的に活動を展開。現地での学習塾運営やオンラインの英語学習プログラムのほか、経済的理由で進学に困難がある子どものために奨学金や資金サポーター制度を通じた支援も行う。また、日本とグアテマラの学校のオンライン交流による国際理解教育の推進にも取り組む。NPOとしての法人化は2022年。



現役隊員への
メッセージ

私の隊員時代の活動では、結果的に芽が出たことは少なかったと思います。ですが、成果が出る、出ないにあまり左右され過ぎず、一人でも心がつながる人と出会えれば、それがお互いの人生を彩ってくれます。出会いとどう向き合っていくか考えながら、隊員生活を楽しんでください

帰国後、教職の傍らでグアテマラの子どもを支援 NPOの立ち上げで活動を一層強化

中学校教員として5年の経験を積んで協力隊員としてグアテマラへ赴任した近藤さん。「思いついたことはすべてトライしたけれど、芽が出たものは少ない2年間だったと思います。一方でかけがえのない出会いもあり、小さな幸せを喜べるような時間でもありました」と振り返る。

帰国後は教職に復帰して多忙な日々を過ごす中、グアテマラでの時間が幻だったかのように消えていくのを切なく感じたという。

「週に1回、現地で知り合った女の子の日本語学習をオンラインで続けていたのですが、その時は職務に忙殺されて乾いた心が潤うのです。揺るぎない感覚だったので、グアテマラとつながっていたほうが私自身が豊かな人生を過ごせるのだと確信しました」

近藤さんがグアテマラを再訪したのは2019年9月。帰国から約1年後のことだった。協力隊時代に親交があった教員と再会し、その教え子の中から、優秀でありながらも家庭の事情で進学できそうにない小学6年生の児童を1人紹介してもらって個人資金で学費のサポートを始めた。「現地に信頼できる大人がいて、確実に資金を学費に充ててくれれば、日本からグアテマラの子どもの支援ができる。これは事業としてやっていけるに違いない、と感じました」。

21年8月からは7カ月間現地に滞在し、オンラインでの英語交流レッスンを行い、奨学金事業で選んだ子ども8人にも英語学習プログラムを提供した。

「学費・インターネット費用を出してくれたり、英語をボランティアで指導してくれる日本人サポーターは、当初は私の知り合いの中から募りました。さらにその人たちの知り合いといったコネクションで広がったことに加え、SNSでボランティア募集もしています」

サポーターとして名乗りを上げてくれた人には近藤さんがオ



幸縁の活動で、日本とグアテマラの児童をつないだ英語の交流授業。活動当初、SNS上でグアテマラ人向けに無料英語教室の参加を募集すると現地の人たちから多くの反響があり、英語学習のニーズを確信したという

ンラインで面会して丁寧に事業を説明している。サポーターは子どもと一対一で直接関わるため、どんな人物かを見極めることは大切な役割となっている。

さらに、日本の学校ともつながっていくためには社会的な信用が必要と考え、サポーターの中から10人ほどの方に正会員になってもらいNPO法人 幸縁を立ち上げたのが22年の6月。近藤さんはその間も日本で教員として働いていたが、早朝からNPOに関する打ち合わせと授業の準備を行い、夜は英語のレッスンを見る毎日だった。

「NPOの業務は団体代表として正解がない中で決断することが多くて精神力を要します。24年3月に疲労で動けなくなり生徒に迷惑をかけてしまったこともあります」

そのため、いったんは教職から離れ、しばらくはNPOの基盤づくりに集中してきた。「常に自信はありませんが、相談できる仲間が増えた今、気持ちの面では大いに楽になりました」。

審査員特別賞（共生社会）

やす た かず き
安田一貴さん

ウズベキスタン／青少年活動／
2011年度1次隊・福島県出身

笑顔の向こうに繋がる未来プロジェクト
PLAY&PHOTO Studio 共同代表

病気や障がい写真館などへ出かけて写真撮影することが難しい子どもと家族に向け、希望の場所での出張撮影を行っている。安田さんと、保育士でもある安田さんの妻が共同代表となり、互いの得意分野を生かして活動。“心に残る撮影体験を届ける”ことをテーマとし、遊びなども交えながら、子どもの様子に合わせて時間をかけて気持ちをはぐして撮影することが持ち味となっている。



現役隊員への
メッセージ

“理学療法士だから理学療法士の仕事だけをすべき”といった固定観念を捨てると、本質的なニーズが見えたりします。それで心に引っかかったことを、誰から文句を言われようと地道に続けていけば、いつか花開くかもしれません。もちろん開かないかもしれませんが、僕自身、まだまだ未熟なのですが！

病気や障がいのある子どもたちに、心に残る撮影体験を！ 笑顔をつめる出張撮影サービスへのチャレンジ

「笑顔の向こうに繋がる未来プロジェクト PLAY&PHOTO Studio」を立ち上げ、2017年から、病気や障がいのある子どもとその家族へ写真撮影体験を届ける活動をしている安田一貴さん。理学療法士として日本の病院で勤務した後、11年に青少年活動隊員としてウズベキスタンへ。血液学小児病院に入院して治療を受ける子どもたちとの遊びやレクリエーションを模索する一環で、彼らの姿をポケットに入っていたコンパクトデジカメで撮影した経験が活動の原点になっている。

「日本のように十分な医療体制ではなく、天国に旅立ってしまう子どもも多い病院でした。自分の撮った写真が子どもの家族にとっては非常に価値のある一枚になるという現実を目の当たりにして、写真というものの意義を強烈に感じた一方、中には撮影をしていない子が亡くなってしまったこともあり、なぜあの時撮ってあげなかったのかと悔やんだりもしました」

帰国後は理学療法士として医療現場に戻り、改めて日本の子どもの現状に触れた。病気や障がいのために記念写真・家族写真を撮る機会が少ないことがわかった安田さんは、自宅を訪問して一緒に遊びながら写真を撮らせてもらう活動を始めた。遊びを通じて子どもと深く関わろうと、ホスピタル・プレイ・スペシャリストの資格も取得して地道に取り組み続ける中、当初は不審がられたり、同業者から「理学療法士の仕事じゃない」と反感を買ったりといった壁にも直面したものの、口コミもあって次第に利用者は増加。

そうした中、「来年を迎えられることが当たり前ではない子どもや家族にとって、折々の記念写真を撮ることには特別な意味がある。きちんとお金をもらい責任を持って取り組むべきだ」とプロになる覚悟を決めた安田さん。1年間、写真家に師事し、クラウドファンディングも活用して本格的な機材をそろえた。信頼を積み重ね、これまでに撮影した家族は、延べ1,187組（2024年末時点）に上る。

撮影では自宅や病院のほか、希望の場所に出張することもある。子どもの病気や障がいの特性、リスク管理に配慮し、必要に応じて美容師が同行し、ヘアセットやメイクを施す。安田さんが大切にしているのは、美しい写真を残すこと以上に、“楽しい体験”を届けること。「隊員時代に培った人間力や空気を読む力を生かし、その子らしさや家族らしさがあふれるような場の雰囲気をつくるのが自分の強み。目の前の子を世界で一番うまく撮るのは自分だという気持ちで臨んでいます」。

現在は、NPO法人 laule'a が運営する放課後等デイサービス「遊びリパーク リノアたまブラ」の管理者を務めるほか、重度障害児を扱う映画にスペシャルニーズスーパーバイザーという立場で携わったりもしている安田さん。8月からはJICA海外協力隊起業支援プロジェクトBLUE（※）に参加し、事業の一層の洗練を目指す。「写真も遊びも理学療法も、病気や障がいのある子どもたちに楽しい時間を過ごしてもらうための手段の一つ。これまで出会った子どもたちの姿が目には浮かぶからこそ、これからも活動を続けていきます」と思いを語った。



子どもの特性やその場の状況に応じた空気づくりを心がける安田さん。理学療法士としての知見や協力隊経験など、今までの積み重ねが一枚一枚の写真に生きている

※JICA海外協力隊起業支援プロジェクトBLUE …JICAによる、帰国隊員の社会還元支援のための事業。起業伴走プログラムなど各種の起業支援策を提供する。

審査員特別賞（災害支援）

山路健造さん

フィリピン／コミュニティ開発／
2014年度2次隊・大分県出身

一般社団法人 多文化人材活躍支援センター 代表理事

「2カ国以上の文化背景を持つ『多文化人材』がその経験や能力、知識、ネットワークを生かし、誰もが生まれた国や在留資格に関係なく活躍でき、平和で幸せに暮らせる社会に貢献する」という目的の下、多文化共生や特定技能外国人支援、国際協力などを行う。2023年10月に正式に法人化し、能登半島地震の際にはウクライナ避難民による炊き出しの実施など、在留外国人が支援する側に回る取り組みも実現した。



サムズアップの親指を曲げて半島の形を表す「能登半島ポーズ」

現役隊員へのメッセージ

協力隊員なら誰しも、現地では“外国人”という立場を経験し、ふとした時に孤独を感じたこともあるはずです。帰国後はぜひ、周りで困っている外国人に声をかけるような簡単なことからスタートし、私たちと一緒に多文化共生の活動に携わってほしいと思います

地域と外国人をつなぎ、支え合う 能登の被災地で多文化共生の実践に挑む

西日本新聞の記者を経て2014年に協力隊員としてフィリピンへ赴任し、有機農業の普及に携わった山路健造さん。大型台風が上陸した時に現地のニュースで流れるタガログ語が理解できず、JICA事務所から日本語で情報を得た時の安心感を今も鮮明に覚えているという。

その“外国人”として生きた経験が山路さんを駆り立てた。帰国後、認定NPO法人「地球市民の会」に入職し、在留外国人支援に取り組んだ。18年には、佐賀に住むタイ人同士の横のつながりをつくろうと「サワディー佐賀」を設立。19年の佐賀豪雨では、多言語の災害情報を発信した。最初は自動翻訳による誤訳で混乱を招くという失敗をしたが、以降は「緊急時に間違った情報を流したら取り返しがつかない」と、母語話者によるダブルチェックをしてから発信する体制をつくった。

活動の幅は広がり、県を超えた多文化共生セミナーの開催や、多言語ハンドブックの制作も行った。22年にロシアのウクライナ侵攻が始まってからは、全国初の官民連携のウクライナ支援プロジェクトの事務局を担当し、避難民の生活支援に奔走。外国人が地域の一員として力を発揮できる社会を目指し、「多文化人材活躍支援センター」を設立した。

転機となったのが24年1月の能登半島地震だ。知人からの依頼で、輪島市で被災した人々の生活実態や避難の状況を全戸調査したが、外国人の姿が見えず、「どこにいて、どう暮らしているのかと不安な思いを持ちました」と振り返る。

後に、避難所や仮設住宅に散らばっていることがわかったが、支援の輪からは取り残されていた。そこで山路さんは炊き出しをして同じ国同士の人が集まる場をつくり、多言語での情報発信も開始した。じかに足を運び、声を聞いて回り、家の修繕や食料の買い出し、寒さ対策など、それぞれの困り事

を解決するためのボランティアや支援制度の窓口につなげた。“よそ者”である山路さんは、「能登の人たちは優しくて、いい意味でおせっかい。フィリピンにも似た居心地の良さがある。きちんと外国人との接点をつくれればもっと化学反応が起きるはず」と確信し、輪島に拠点を置くと決めた。平日は輪島市社会福祉協議会の職員として在宅生活者の見守り活動に当たり、週末は外国人住民との交流イベントを企画する。

行政の理解や連携には課題も残るとしつつ、「外国人は助けられる側であると同時に、支える側にもなれる存在です。今後は地域の人と外国人をつなぎ、お互いの顔が見える関係性をつくる活動を展開したい」と山路さん。地域と外国人を“つなぐ”役割である「多文化ケアマネージャー」を育成することも視野に入れ、能登から新たな多文化共生の形を描く。



自分たちの入居する仮設団地で炊き出しを行うカンボジア人の技能実習生たち

審査員特別賞（スポーツと開発）

糸井 紀さん

エクアドル／水泳／
2013年度1次隊・岐阜県出身

国際審判員（水泳）

国際的な大会の審判を行う資格を有する審判員のことで、水泳の場合は国際パラリンピック委員会（IPC）と世界パラ水泳連盟（WPS）により認定される。日本国内で開催される国際大会のほか海外の大会に出張することもあり、糸井さんの場合、直近ではパリ2024パラリンピック競技大会でスターターを務めた。審判員としての役割のほか、各国の審判員の育成のため講演会を行うなど、国境を超えたスポーツ界の発展に寄与する立場でもある。



現役隊員へのメッセージ

日々の活動の中ではいろいろと嫌なことがあったり、めげたりすることもあるでしょう。私も序盤からプライドを折られて随分めげました。ですが、その経験がちゃんと思ひ出や笑い話になる時が来るので、逃げることなく活動をやり切ってほしいと思います

協力隊時代に培った巻き込む力で 国際審判員として多文化の懸け橋に

日本人唯一のパラ水泳国際審判員として活躍する糸井 紀さん。競技ルールに基づいた公平・公正なジャッジで大会を支えるが、その一つ一つの判断が選手の人生や国の命運を左右するため、「毎回胃が痛くなるほどの重圧がある」と語る。切断、片麻痺、視覚障害など、選手の障害が多様でクラス分類された中での競争となるパラ水泳は、ルールが複雑で想定外の事態も多く、オリンピックとは違う難しさがある。糸井さんは常に平常心を保ち、選手たちが最高のパフォーマンスを発揮できるよう全力を尽くす。

地元・岐阜県で高校の体育教諭として水泳部を指導していた糸井さんが、現職参加で協力隊に参加したのは2013年、40歳の時。赴任先のエクアドルで念願のナショナルチームの選手・コーチの指導に当たったが、最新の技術やトレーニング方法を一方的に教えようとして総スカンを食らい、「思いきりプライドをへし折られました」と振り返る。

そこで考えを改め、相手の懐に入って仲間として認めてもらうことから始めた。やがて信頼を得て、チームをW杯出場に導くことができたが、南米で行われた国際大会で目にしたずさんな審判に衝撃を受け、「審判の資質向上を目指し、途上国の力になろう」と国際審判員を志す。

15年に帰国した糸井さんは教職に復帰し、岐阜県水泳連盟副理事に就任。並行して、国内最上級であるA級審判員の資格を取得すると、18年にシンガポールで1週間の講義と筆記および実技試験に挑んだ。実技試験では英語でのディスカッションに苦戦しながらも、日本人として初めて国際審判員に合格。IPCとWPSの認定を受け、東京2020大会、パリ2024大会の両パラ競泳でスターターを務めるなど、国内外の多くの大会で審判員としての経験を重ねる。今後に向けては、岐阜



パリ2024パラリンピック大会に参加した糸井さん

県水泳連盟の副理事長として、日本開催の国際大会に出場する選手団の事前合宿を受け入れることも目指す。岐阜県にゆかりのあるブラジルやペルーの日系人らにも協力を呼びかけ、選手がコンディションを整えられるサポート体制を企図しており、さまざまな文化の人々の橋渡し役を担っている。

現在も教員としての職務と並行しながら、世界各地で活躍する糸井さん。学校や同僚の理解を得るため、「誰よりも仕事を一生懸命やり、糸井なら許せるという人間関係づくりを心がけている」という。

今後は、国際審判員として東京2025デフリンピックや2026年に愛知で開催される第5回アジアパラ競技大会での活動が控えているほか、学生の指導、審判員の養成、後進の指導やコーチングといった取り組みにも力を注ぐ。「協力隊経験を岐阜県の教育にも還元し、水泳を通じて出会ったさまざまな国の人たちに恩返しをしていきたい。感謝を忘れずに、職務を全うしたいと思います」。

就職ストーリー

自分で考え、自由に働きたい
業種よりも重視した“働き方”

Text＝油科真弓 写真提供＝田邊一馬さん



今月の先輩

たなべかずま
田邊一馬さん
エチオピア／体育／
2017年度1次隊・福岡県出身

就職先 TSK株式会社

事業概要 本社は富山県。物流デザインのコーディネーターとして、包装資材の企画・設計・提案、物流効率を最適化する改善提案などを行う。

田邊一馬さんの略歴

1992年 福岡県生まれ
2017年3月 大学卒業
2017年7月 協力隊員としてエチオピアに赴任
2019年7月 帰国
2019年10月 TSK株式会社入社

日本で体育教師になることを目指して教育学部に通っていた田邊一馬さんが海外を志向する転機となったのは、オーストラリアに留学している友人に会いに行き、海外に興味を持ったこと。自身も大学を休学してワーキングホリデーでオーストラリアに行き、海外で活動したいという思いが一層強くなっていく中で思い出したのが、先の友人との会話に出てきた協力隊のことだった。復学した大学4年の春にさっそく応募し、卒業後すぐに体育隊員としてエチオピアに赴任した。

配属されたのは、州都から150kmほど離れたコルムという小さな町の小学校。外国人自体が珍しいような地方で、高学年担当の教員に体育の指導法を助言し、授業の改善を支援することが要請内容だった。先生が学校に出勤しないなど、活動が思うように進まないことも多々あったが、活動の中で田邊さんが意識していたのは、先生自身に考えてもらうこと。「日本で学んだことが絶対ではないので、日本のやり方を例に挙げ



グラウンドで生徒たちにサッカーの指導をする田邊さん

ながら、エチオピアではどうするのがいいのか、話し合うようにしていました」。印象に残っているのは、1人の先生にマット運動の前転の教え方を伝えた時のこと。「まずは先生ができるようになり、それを子どもに教え、成功したら同僚の先生にも共有してくれました。子どもが前転に成功すると先生たちはとても喜んでいて、私も嬉しかったです」と振り返る。

赴任中から、帰国後の進路は企業に絞った田邊さん。重視していたのは「自由に働けること」と「海外で働けること」の2つだった。大企業でそれを求めるのは難しいと考え、帰国すると業種は問わず中小企業の採用情報を探した。そして転職エージェントから送られてきたのが、梱包材を製造するTSK株式会社（以下、TSK）の情報だった。同社は海外唯一の子会社であるTSKベトナムで現地採用の日本人社員が退職してしまい、すぐにでもベトナムに赴任できる営業人材を探していた。複数の会社にエントリーしていた田邊さんは他に6社から内定をもらっていたが、最終的に社長の人柄とアットホームな会社の雰囲気に引かれ、同社への入社を決めた。

それから6年。入社当時は田邊さん1人だったグローバル事業推進部は、社員5人に増員。メキシコ進出が決まると田邊さんはその責任者に抜てきされた。現在はベトナム、メキシコ、日本を忙しく飛び回る日々を送っており、まさに就職活動で重視した2つを体現している。「梱包材というコストダウンの対象となりがちな商材で勝負をするには、信頼関係が大切です。だからこそ、お客さまとパートナーシップを築いていくところに、一番のやりがいを感じています」

1 就職活動

2019年8月

帰国後、JICAの帰国隊員向けの説明会で知った就職支援セミナーに参加したり、進路相談カウンセラーに相談したりしました。同時に、転職エージェントに登録したのですが、登録の際には、駐在や出張で海外に行けること、また自分で考えて自由に行動できる中小企業を希望。自己PRには、コミュニケーション能力と行動力があることをアピールしたと記憶しています。

2 エントリー

2019年9月

転職エージェントから何日かに1回、希望に合った会社のリストが送られてきていたのですが、その中にあったのがTSKです。ベトナム駐在員を募集していたことが決め手となりエントリーしました。いいと思った会社には並行して次々とエントリーしていたので、この時点では、TSKの事業概要はまだ詳しく調べていませんでした。

3 1次面接

2019年9月

エントリーしてすぐに面接をしたいと連絡があり、その翌日、社長（当時）の上京に合わせて東京のホテルで1対1の面接をすることになりました。社長から会社の概要やベトナムでの事業について説明を受けた後、私のエントリーシートを見ながら、コミュニケーション能力や行動力について具体的なエピソードを聞かれました。面接の後は食事にも誘われ、トータル2時間くらい話をしました。入社後に聞いた話では、この面接の直後、社長から取締役「絶対に採用するように」とメールが入っていたらしいです。

4 2次面接

2019年9月

1次面接の翌週、富山県の本社で取締役との2次面接がありました。工場見学では従業員のアットホームな雰囲気が伝わってきて「いい会社だな」と感じました。その日のうちに内定通知が来たのですが、他に6社からも内定をもらっており、少し待ってほしいと伝えました。条件面などで悩みましたが、「仕事で結果を出したら希望に応える」という社長の言葉と人柄が決め手となり、入社を決めました。

入社 2019年10月

現在の仕事

入社当時、TSKベトナムには日本人が駐在しておらず現場が混乱していたため、着任当初は顧客である日系企業を回って状況を整理するところから始め、2年ほどかけて体制づくりに取り組みました。今ではベトナム人スタッフだけで業務を進められる仕組みが整い、経営も赤字から黒字に転じました。ベトナムでの実績を評価され、昨年からメキシコ進出も任せてもらっています。現在は、日本の本社においてはグローバル事業推進部長・執行役員として企画経営に、TSKベトナムではシニアセールスマネージャーとして営業や社員の育成に、TSKメキシコでは社長として事業立ち上げに関わっています。



TSKベトナムで社員の指導に当たる田邊さん

後輩へメッセージ

海外で働いていると、思いどおりにいかないことが多々ありますが、「仕方ない」と受け入れるようにしています。これは異文化の中で現地の人たちと関わって悪戦苦闘した協力隊経験を通じて、自分自身の許容範囲が広がったおかげだと感じています。私にとって、それほど協力隊での経験は意味あるものでした。後輩の皆さんもそうした力を身につけているはずですから、その上で、自分が楽しいと思えること、やりがいを感じられること、時間を費やす意味があると思えるフィールドに挑戦してほしいと思います。

JICA 海外協力隊ウェブサイト
「進路開拓支援のご案内」

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/index.html



プールという舞台で言葉を発さず、コミカルな動きと表情で観客を驚かせ、笑わせる。水中パフォーマンス集団「トゥリトネス」で道化師として演じてきた不破 央さんは、平泳ぎの元日本記録保持者であり、グアテマラに水泳隊員として赴任した協力隊OVでもある。

「オリンピックの夢が破れ、現役引退を決めてこれからどうしようという時に電車で見かけたのが、協力隊募集の広告でした。何もない砂漠に、ひびの入った眼鏡をかけた男性が苗木を持って立っている写真になぜかジーンときて、自分もこういう場所で何かできるのかと問いかけられた気がしました」

勤めていた会社を退職して協力隊に応募し、配属されたのはグアテマラ南西部の都市マサテナンゴの水泳協会。そこで子どもたちに水泳指導をしながら組織づくりを支援することが要請されていたが、着任早々に衝撃を受ける。

「プールは草ぼうぼうで使われている気配がない。街外れの不便な場所で、誰も使わないので15年も放置されていたらしいのです。私一人で、草を鎌で刈り、ヘドロをブラシで取り除き、プールをきれいにすることから活動が始まりました」

プール掃除が終わり、水を入れられるようになったのが2カ月後。ようやく指導できる体制になったが、「最初、12人の子どもたちに日本のスイミングスクールのようなメニューを行うと、嫌だとかつらいとか大ブーイング。皆だんだん来なくなり、ついに2人だけになってしまいました」。

これは本末転倒だと思ったある日、破れかぶれで「今日は

遊ぼう!」と水中鬼ごっこや水球をして遊ぶことにした不破さん。それから毎日プール遊びをしていたところ、辞めた子ども顔を出すようになり、だんだんと増えていった。遊びを続ける中で不破さんはある時、重要なヒントを得た。

「子どもと鬼ごっこしても当然、僕は追いつけません。すると1人の子が、『なぜそんなに速く泳げるの?』と聞いてきました。これはチャンスだ!と『クロールは、手をもっと前のほうに入れて、水を後ろのものほうまで押すんだよ』と説明し、初めて水泳指導に近いことができたのです。学びの本質のようなものを目の当たりにして雷に打たれたような衝撃があり、それから教える自分も楽しくなりましたし、教わる子どもたちの表情も生き生きとしていきました」

その後、練習の時間も増やしていったが、常に笑い声のあるプールにすることは心がけた。不破さんがスペイン語で話す落語の小ばなしは子どもたちに大うけで、水泳教室の人数は、任期满了時には120人に。この時の子どもたちの笑顔が、帰国後の不破さんの進路を決めた。

「小ばなしの時に落語家のように上下を切ると、皆が面白がってくれました、その感覚がとても嬉しく、演じることも楽しかった。“表現”をもっとやってみたいと思ったんです」

表現といえば俳優。アルバイトをしながら俳優修業に励み、さまざまなワークショップに通う中で、“道化師”というせりふのない世界に初めて触れる。

「しゃべらずに人に伝えるのは、下手なスペイン語を駆使して

表現で笑わせていた経験に通じます。ピンときて道化師の修業を始めたのですが、一般の役者以上に仕事がありませんでした。この道で成功している人は、一芸に秀でている。そこで自分の一芸は何かと考えると、水泳でした。ピエロがプールに来たら何するだろうかと考えてみるとネタがどんどん浮かんできて、1本のストーリーができました」

当初は1人だったが、仲間が徐々に集まって水中パフォーマンス集団を結成。グアテマラで出会った水泳チームの名前を取って、トゥリトネスと名づけた。スイミングクラブなどで公演する中で、水の楽しさを伝え、水泳の世界に導くという意味を込めて“水の導化師”と掲げるようになった。

日本代表時代の関係者の計らいでメディアで紹介されてからは仕事の幅が広がり、映画『ウォーターボーイズ』の水中演技指導などにも関わるうち、トゥリトネスとしてのイベントも増えていった。不破さんが出演した公演は26年間で1,015回。2024年の最終公演を最後にパフォーマーは引退したが、やり残した感覚はない。アスリートとしての挫折や隊員時代の試行錯誤、“水の導化師”への転身を振り返り、「将来こんな素晴らしい未来が待っていると、隊員時代の自分に伝えたい」と不破さんは口にする。

「隊員時代の経験は今もずっと生きています。現役隊員で、今がつらいという方も、よりつらいほど後で得られるものも大きいはず。もう嫌だと思った時は、目の前の出来事を楽しみ、目の前の相手を楽しませることに尽きると思います」

水泳代表選手の道が断たれ、グアテマラへ 子どもたちと水泳を楽しむ経験で導かれた新たな人生

派遣から始まる
未来
先輩隊員たちの社会還元



“水の導化師”として
水泳の楽しさを伝え続ける

ふ わ ひさし
不破 央さん
グアテマラ/水泳/1993年度1次隊・静岡県出身

Text=池田純子 写真提供=不破 央さん



1 動きや表情だけで表現して子どもたちを楽しませるトゥリトネスのパフォーマンス 2 グアテマラでの隊員時代、子どもたちに水泳の指導をする不破さん 3 2024年でパフォーマンスの一線を退いた不破さんの今後の展望は、水泳だけでなく他のスポーツでも道化師によるエンターテインメントを行うことだという

不破さんの歩み

1968年 静岡県に生まれる。小学校1年生の時、スイミングクラブに入会した。中学生時代には日本選手権の平泳ぎで2回の優勝を果たす

1986年 全米オープンで自身の日本記録を塗り替えて優勝

1992年 パルセロナオリンピック代表選考から漏れた後、現役を引退



オリンピックの選考には3度挑戦しましたが、一度も出場できませんでした

1993年 水泳隊員としてグアテマラに赴任



現地の子どもたちが、これまでストイックに練習を重ねてきた自分とは全く違うアプローチで、学び、成長していく姿を見て衝撃を受けました

1995年 帰国後、俳優を志して演劇の世界へ

1998年 水中パフォーマンス集団「トゥリトネス」結成。“水の導化師”としてメディアで紹介される



水の導化師というニックネームはメディアで紹介されたのが最初ですが、後にトゥリトネスの公演を見たことで子どもがプールに行くようになったという保護者からの手紙をもらい、自ら水の導化師と名乗るようになりました

2000年 映画『ウォーターボーイズ』で水中演技を指導



まず俳優たちを楽しませることを第一に考えました。泳ぐことで、こんなことができるという経験をしてもらってから、演技の練習に入る。この時もグアテマラの経験が生きました

2024年 活動26周年を迎え、年末でパフォーマーを引退する

2025年 ドキュメンタリー映画『The Swimming Clown 水の導化師の物語』（監督・撮影：竹内佳嗣）が公開



ファンや法人からの支援金で製作。日本各地のトゥリトネスショーに加えて、グアテマラへもロケに行き、当時の教え子たちと再会しました

REPORT

グローバルフェスタ JAPAN 2025 開催

2025年9月27日(土)、28日(日)の2日間、新宿住友ビル三角広場(屋内)などで「グローバルフェスタJAPAN 2025」が開催されました。今年のテーマは、「世界を変える、あなたの一歩〜プラス1の国際協力〜」です。本イベントは、国際協力活動、SDGs などに取り組む官民さまざまな団体が一堂に会する国内最大級の国際協カイベントで、当日は、ブース出展やステージイベント、民族衣装体験コーナーなど盛りだくさんの内容となりました。



昨年のグローバルフェスタ JAPAN の様子

SUPPORTS

至善館「国際協力人材奨学金」のご案内

大学院大学至善館(東京都中央区)で、協力隊経験者など海外における国際協力の現場経験を1年以上有する方を対象に、半額から全額の授業料を減免する「国際協力人材奨学金」の募集が始まりました。至善館はMBA in Design and Leadership for Societal Innovationという、ビジネスと社会イノベーションの融合を目指すユニークなMBAスクールで、リベラルアーツを深く体感できる場です。20以上の国と地域から集った企業人、NPO職員、起業家、難民が日英クラス各40名の少人数で学ぶ中で、事業構想を考えて社会イノベーションを生み出せるリーダーを育成しています。

隊員経験を未来に生かしたい方はぜひ応募をご検討ください。



EVENT

JOCV発足60周年スペシャルイベント Home Coming Day

— 帰ってきた隊員たち —

駒ヶ根訓練所OVの皆さんと、協力隊事業を支え応援してくださっている皆さんが訓練所に集い、語り、懐かしんでいただけるイベントを開催します。駒ヶ根訓練所OV40名限定で訓練所宿泊プランもご用意しました。OVの皆さん、懐かしの駒ヶ根訓練所へ里帰りませんか。



【日時】2025年10月25日(土)
15:00~18:00(受付13:00~)

【場所】駒ヶ根青年海外協力隊訓練所

※イベント当日・翌日は、駒ヶ根市内と訓練所を結ぶ無料シャトルバスを運行します。

※宿泊しない場合でも事前申込が必要です。

※申込締切:10月10日(金)定員に達し次第締切。

●プログラム

- ・OVパネルディスカッション
- ・60周年記念映像上映会
- ・交流会(駒ヶ根OV×一般市民×2025年度2次隊訓練生)

※60周年記念グッズのプレゼントも!

【お問い合わせ】JICA駒ヶ根
TEL: 0265-82-6151
MAIL: jicakjv-jocv@jica.go.jp

詳細・申込はこちら



JICA 海外協力隊派遣現況

2025年8月末現在

現在の
派遣国数
74カ国



アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	38	
エチオピア	20	
ガーナ	51	1
ガボン	9	2
カメルーン	19	
ケニア	41	1
ザンビア	40	
ジブチ	13	
ジンバブエ	20	
セネガル	33	2
タンザニア	31	
ナミビア	12	
ベナン	27	
ボツワナ	23	3
マダガスカル	38	
マラウイ	38	
南アフリカ共和国	4	
モザンビーク	20	1
ルワンダ	34	1

アジア地域

国名	一般	シニア
インド	17	
インドネシア	36	
ウズベキスタン	18	
カンボジア	32	
キルギス	43	
ジョージア	16	1
スリランカ	20	
タイ	50	3
タジキスタン	2	4
ネパール	23	3
バングラデシュ	2	
東ティモール	28	
フィリピン	16	
ブータン	24	1
ベトナム	42	
マレーシア	21	2
モルディブ	5	
モンゴル	32	2
ラオス	45	5

大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	4	
サモア	14	
ソロモン	25	1
トンガ	21	1
バヌアツ	21	
バプアニューギニア	17	
パラオ	24	3
フィジー	13	3
マーシャル	15	1
ミクロネシア	22	1

欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	10	

中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	21	
チュニジア	9	2
モロッコ	38	1
ヨルダン	23	

中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン		5	9	1
ウルグアイ		4		
エクアドル	34	4		
エルサルバドル	29			
キューバ		2		
グアテマラ	20			
コスタリカ	19			
コロンビア	27	4		
ジャマイカ	9			
セントルシア	14	1		
チリ	6	1		
ドミニカ共和国	21	1	6	
ニカラグア	18			
パナマ	19	1		
パラグアイ	28	5	8	1
ブラジル				59
ベリーズ	11			
ペルー	39			
ボリビア	53	1		
ホンジュラス	25			
メキシコ	17	7		

合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	1,649 (612/1,037)	81 (63/18)	82 (29/53)	2 (0/2)	1,814 (704/1,110)
累計 (男性/女性)	48,996 (25,597/23,399)	6,745 (5,445/1,300)	1,690 (654/1,036)	555 (256/299)	57,986 (31,952/26,034)

一般 = 青年海外協力隊/海外協力隊 シニア = シニア海外協力隊 日系一般 = 日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊 日系シニア = 日系社会シニア海外協力隊 (単位:人)

編集後記

P8-15「特集」で紹介した社会還元表彰受賞者のお一人、糸井 紀さんは国際審判員や指導者として活躍中ですが、自らも選手として、8月にシンガポールで開催された世界マスターズ水泳選手権にて50-54歳の部に出場。50mと100mの背泳ぎで1位に輝いたとのこと。日本新記録でもあるそうで、まだまだ現役!との活力を感じます。(飯淵一樹)

「表紙」の飯田康史さん。スポーツ指導で子どもに道具掃除をさせるのはブラジル文化ではなじみがなく、日常の練習の中での普及は難しいと思ったそうです。当時、試合で勝つことが増えてきていたので、試合後なら気分よくできるのではと提案してみると、すんなり受け入れられたとか。工夫とタイミングが大事ですね!(成松佳子)

クロスロード

【2025年10月号】 第61巻第8号 通巻710号
発行日: 2025(令和7)年10月1日

編集・発行: 独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

制作協力: 一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7 昇龍館ビル2階

デザイン: 亀井敏夫

印刷・製本: 弘報印刷(株) 校正: 佐藤智也

本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。
アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



『クロスロード』は、
JICA 海外協力隊の
ウェブサイトでも公開しています。
<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



- 本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。
- 本誌に掲載されている記事等の内容は、協力隊員(OV含む)の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。

あの日、地球の、あの場所で。

任地の思い出を聞きました。

昔ながらの生活が残るミクロネシアの奥ゆかしい伝統の世界

もり ひろたか
森 洋貴さん

ミクロネシア/体育/2016年度2次隊・大阪府出身

私が活動したミクロネシアのヤップ島は石貨(※)の文化が残るなど、伝統を色濃く残した地域でした。当時、既にビールやインスタント麺といった外来の物が島民たちにとって一般的なものになっていましたが、一方で、昼はタロイモ畑へ行き夜は漁に出る、自給自足に近い生活もまだ健在。先祖の時代からの身分差が現代の人間関係に直結しているなど、外国人が一見してもわからない伝統や習慣が影響を持っていたりもして、とても独特な社会なのです。

赴任当初に印象的だった文化の一つが、誰かの家を訪ねる時に、葉っぱのついた枝を手にして行くこと。現地の住宅は大抵、茂みの奥へ分け入った先に高床式の家屋が建っている構造なのですが、訪ねる時に持った枝を見せながら入っていくのです。初見の時は「一体なんだろう?」と思ったのですが、

こうして敵意がないことを示す意味合いがあるのだとか。なじみの家の時にはほとんどしないので、日本でいえば、初めて訪ねる家に正装で菓子折りを持って何うようなものでしょうか。

私も外国人とはいえ、現地のしきたりには気を遣って暮らしていました。というのも、ヤップ島では表立って誰かを叱責することは少ないものの、見ていないようで互いをしっかり見ていて、遠回しに注意されることも。それに気づかずに嫌がられたりすることがないよう、意識した立ち振る舞いが大切なのです。

逆に良いことをすれば、その話もすぐ広まりますし、はるか遠い南の島ながら、まるで日本の古い町のような奥ゆかしい社会ともいえるでしょう。良くも悪くもムラ社会的な伝統の世界にどっぷり浸かった2年間でした。

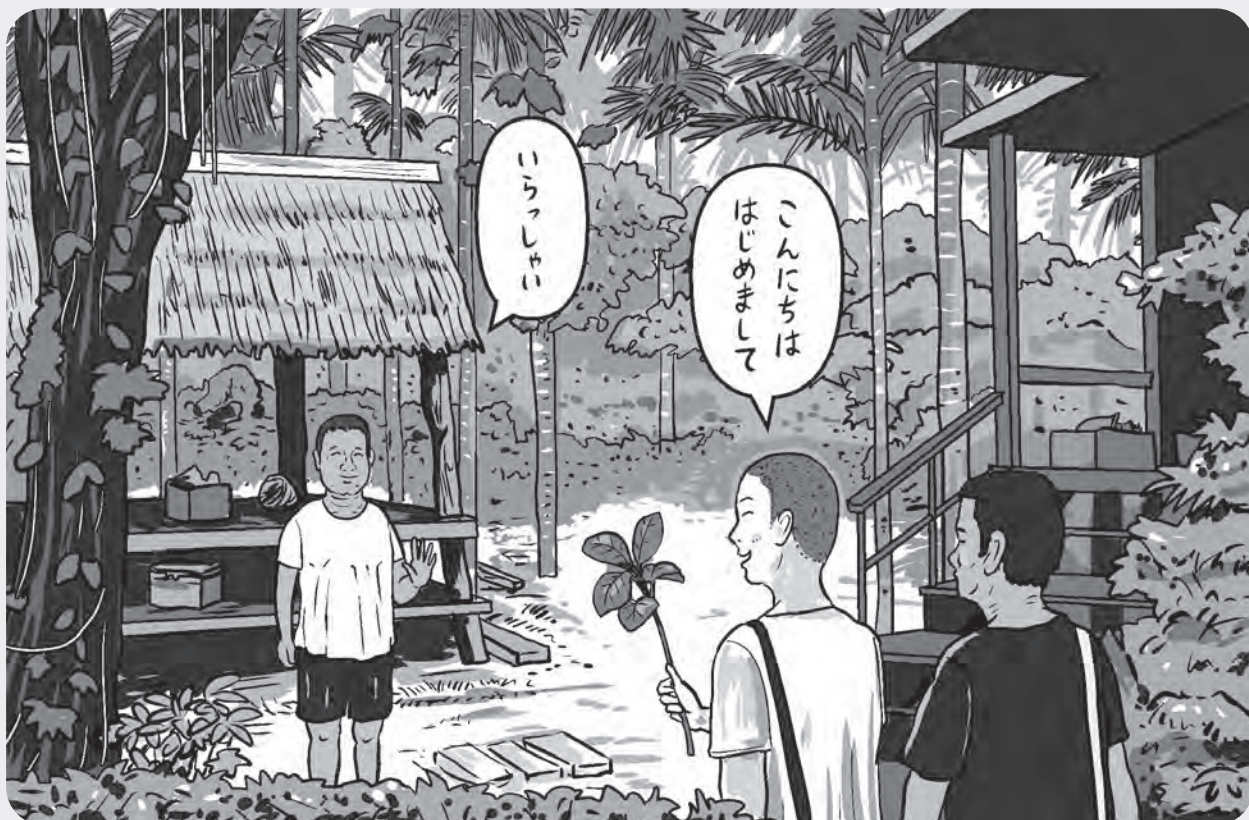


Illustration = 牧野良幸 Text = 飯淵一樹(本誌)

※石貨…ヤップ島で伝統的に用いられる、主に円形で中央に穴が開いた石板。貨幣として日常的に使うものではなく、儀礼的な贈答品として冠婚葬祭など特別な時にやり取りされる。

任地の食生活に彩りき!

隊員めし

今月の料理・インド

北インドで定着した中華風料理

マンチュリアン



From India



北インドで定番の朝食「パラタ」(左)は、全粒粉が材料の薄焼きパンで、ヨーグルトやバターをつけて食べる。「毎朝、校長の奥様が作ってサブジ(野菜の炒め物)などを添えて出してくれて、私の大好物でした。写真は私が初めて自分で作ったパラタです」



教える人



いそがい あや
磯貝亜耶(旧姓 今野)さん
インド/日本語教育/
2013年度3次隊・岩手県出身

中学生時代の交換留学経験などから海外に興味を持ち、大学卒業後に日本語教師の資格を取得して協力隊に参加した。私立学校で教員と共に授業を行う要請だったが、教員が不在となったため、2年間、唯一の日本語教師として一人で授業を行った。帰国後は福島県の専門学校で日本語教師を続けている。

磯貝さんはデリーバブリックスクール・モラダバード校に配属され、授業で生徒たちに日本語を教えたり、日本文化を紹介したりした



材料(2人分・12~15個)

〈野菜の団子〉

タマネギ …… 1/4個
ニンジン …… 1本
ピーマン …… 1/2個
葉物野菜(キャベツ、コマツナなど) …… 50g
小麦粉 …… 60g
片栗粉 …… 小さじ1
チリパウダー …… 小さじ1/2
クミンパウダー …… 小さじ1/2
塩 …… 1つまみ
こしょう …… 少々
油 …… 適量

〈ソース〉

ニンニク …… 1かけ
ショウガ …… 1かけ
片栗粉 …… 小さじ1
中華スープの素 …… 小さじ1と1/2
しょうゆ …… 小さじ1
酢 …… 小さじ1
砂糖 …… 小さじ1
水 …… 200ml

料理について /

マンチュリアンは、北インドで一般的なおかずで、現地では中華料理だと思われていますが、実際は中華料理店を営むインド人が創作した料理だそうです。それが広く定着したものです。私は配属先の校長の家の二軒隣に住んでいたのですが、校長の奥様がよく作ってくれた料理でもあり、しょうゆ味の中華ソースが、日本でなじんできた味に近くて懐かしかったものです。

レシピ

- ニンジンをすりおろす。他の野菜はみじん切りにする。
- ボールに①の野菜、小麦粉、片栗粉、チリパウダー、クミンパウダー、塩、こしょうを入れて、箸などでかき混ぜ、野菜から水分が出て団子にまとめられる粘りの状態にする。まとまらないようなら水を小さじ1ずつ入れる。逆にゆるいようなら小麦粉を足して調整。
- ②を大さじ2くらいずつ手で丸め、4~5個ずつ、熱した油に入れて揚げる。油の温度は中温で、団子の表面がこんがり色づくまで揚げて取り出しておく(目安として3分程度)。
- ソースを作る。ニンニク、ショウガをみじん切りにする。
- フライパンを熱して油を引き、④を入れて香りがしてきたら、水、中華スープの素、しょうゆ、酢、砂糖を加えて沸騰させる。
- 片栗粉小さじ1を水小さじ2(分量外)で溶いて、⑤に加え手早く全体を混ぜる。もう一度沸騰させてから③の団子を加えて全体にからめる。

レシピ・写真提供 = 磯貝亜耶さん
Text・再現料理・Photo(再現料理) = 阿部純一(本誌)



公開！

私の派遣国生活

[ラオス]

写真提供 = 伊丹 咲さん Text = 阿部純一 (本誌)



い だ み さ き

伊丹 咲さん

ラオス/体育/

2024年度1次隊・徳島県出身

活動の様子

4つの小学校を回って子どもたちの体育授業の指導をし、そのノウハウを現地の先生方に伝えています。私が生徒に教えた“体づくり運動”を先生が実践してくれているのを見かけた時は嬉しかったです。子どもたちには、運動に適した服に着替えることや、グラウンドのごみ拾いをするところから指導して、最近は自主的にごみを拾う姿も見られるようになりました。学校行事が少ないため、サッカー大会や日本祭りを開催したところ大盛況！活動2年目は運動会を行おうと計画しているところです。



巡回している4校のトーナメント方式で開催したサッカー大会。「ラオスの子どもたちは男女共にサッカーが大好き。私は子どもの頃からサッカーを続けているので、その技術を伝えています」

暮らしている市、町、村

ラオス北部のウドムサイ県サイ郡が私の任地で、県の中心地として栄えています。県の北側が中国と国境を接しているためか、町には中国人や中華料理店が多いです。市場やスーパーもあり、私は毎朝、市場を見て、オオトカゲやヤマネコ、コウモリなど日本にない食材に驚いたり、旬の果物を買ったりしています。



山にある仏塔を意味する“ブータート”。「ウドムサイ県で数少ない観光地の一つで、夕日がとてもきれいです」



伊丹さんが気に入っている川が眺められるカフェ。「コーヒーやミントが入ったミルクティーがおいしいです」



中華料理店が多いウドムサイ県では本格中華がリーズナブルに食べられる

住まい

大家さん宅の敷地内にある一戸建てに住んでいます。冷蔵庫や洗濯機、電気鍋など生活に必要なものはそろっていて、快適に暮らしています。一番楽しい時間は、広い庭にテーブルと椅子を置いて、とても親切な大家さんご夫婦やその娘さん夫婦、お孫さんとご飯をいただいたり、おしゃべりしている時です。



間取りはリビングとキッチン、シャワールームのほか、部屋が3室。うち1室にはエアコンがついていて、寝室や勉強部屋として使っている

ラオスではもち米を手で丸めて食べる。添えてあるのはカイペンと呼ばれる川海苔



食べ物

大家さんが朝炊いてくれるもち米を職場に持っていくます。おかずを皆で持ち寄って食べるのがラオスの昼食のスタイルです。米粉の麺に肉みそをのせたカオソーイという料理が好きで、いろいろな店を巡って食べ比べしています。

伊丹さんが市場で買った調理されたカプトムシ。「中にハーブが詰めてあってつくだ煮のような味で、けっこうおいしかったです」



大家さん宅の庭で親戚や友人、近所の方々が集まって食事会を開いた時の様子

JICA海外協力隊
応援基金皆様からの応援
お待ちしております青年海外協力隊事務局
公式InstagramJICA海外協力隊のリアル
お見せします

JICA_KYORYOKUTAI

JICA海外協力隊
公式LINEアカウントシゴト診断、教えて！FAQ
などぜひ活用下さい